

琉球大学学術リポジトリ

教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて その2 ～発声指導や歌唱指導から探る～

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): 発声法, 発声指導, 歌唱実践, 歌唱指導, 歌唱教材 キーワード (En): 作成者: 持松, 朋世 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020201

教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて その2

～発声指導や歌唱指導から探る～

持松 朋世*

To foster effective singing methods for university students aiming to become teachers Part2

～ Explore from vocal guidance and singing guidance ～

Tomoyo MOCHIMATSU

要 旨

本稿は保育者養成校での歌唱の講義、小・中・高の教員を目指す学生の歌唱や声楽の授業において、「学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて その2」として考察を述べる。歌唱における困難さを感じる要因は個々によって様々である。本研究では教育者を目指す学生の歌唱指導における、発声法や発声の指導法、歌唱指導の実践例について、筆者が2023年度に作成した学校教員研修用の動画コンテンツの内容に加えて詳細に述べる。またそこから得た気付きや課題を挙げる。授業の中で学生が効果的な歌唱法を身に付けて教育者として今後活用させていくであろう歌唱法の醸成に向けた取り組みや、筆者自身の今後の課題について述べていくこととする。

キーワード：発声法、発声指導、歌唱実践、歌唱指導、歌唱教材

1. はじめに

1-1 研究の動機

筆者は保育者養成校での歌唱指導や、教育学部所属学生対象の小学校の教科に関する科目である「音楽」の弾き歌いや歌唱指導、音楽教育専修生対象の「声楽」や、全学の「合唱」の授業において指導を行っている。今回の研究の動機として、まず学生の音楽の基礎知識への理解が演奏表現に繋がっているとはいえないこと、歌唱指導における学生自身の基礎知識や技能、発声指導に課題を持ったことに因る。また筆者は琉球大学教育学部の、令和5年度文部科学省委託事業の、沖縄県の教員に向けた「おきなわ教員研修高度化フォーラム」¹の学校教員研修提供システム（申請型）の研修コンテンツを作成しながら、歌唱指導の内容に課題を感じたことも研究動機の一つである。さらに筆者自身の演奏実践を通して、学生の歌唱表

現や学生への指導内容において改めて課題を抱いたことにも因る。したがって本稿では、教員を目指す学生に対するより効果的な歌唱法を見出していくべく、考察を深めていきたい。

1-2 研究の目的

本稿は、学生の歌唱や声楽の授業における「教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けた取り組み その1」²から継続して、発声指導や歌唱指導の方法から考察を行う。本研究は沖縄県における現任教員の歌唱指導の一助となるべく、また保育者や教員、音楽指導者を目指す学生が、学習指導要領の指導内容を理解し、知識・技能を身に付け、自ら主体的に問題解決に向き合いながら思考・判断・表現し、教員として子どもたちと音楽活動を持続的で豊かなものにしていくために、達成目標に向けて多角的な視点から物事を捉

*琉球大学教育学部音楽教育専修所属

える力を深化させることを目的とする。また歌唱に困難を感じる部分の予測や、言葉の発音やリズムに留意する箇所、発声指導で使用される言葉や教科書記載内容についても考察を行っていく。さらに楽曲を挙げて、筆者自身の歌唱の演奏実践や、学生が実践する歌唱や指導の内容から、効果的な歌唱法の醸成に向けた取り組みの考察を行うことを目的とする。

1-3 研究の方法

歌唱における研究は、幅広い分野や楽曲に渡り、多くの先行研究が為されていることは周知の通りである。本研究では保育者や教育者を指す学生の歌唱の指導法において、発声指導や歌唱指導に焦点化を図って考察する。学生の歌唱への取り組みの実態や学生へのインタビュー、授業時の学生の発言から気付きを得た内容など、指導内容や実践例を挙げて述べる。さらに筆者自身の演奏実践や学生への歌唱指導の一例を挙げ、更なる指導法の研究への足掛かりとすべく論じていく。なお一部は研修コンテンツの中で提示しているが、概要のみの部分もあるためここでは詳細について述べることとする。

2. 保育者や教員を指す学生の歌唱の実態

保育者養成校での指導では、歌唱の基礎となる発声技能を身に付けて、歌唱表現法や歌唱指導法の修得を図ることを目的としている。歌唱活動はクラス全体という集団から少人数のグループ発表、そして最終試験では人前で暗譜演奏、というように段階を設けて行っている。また指導する内容は以下の通りである。保育者を指す学生が幼児教育における子どもの歌や音楽活動の意義について考察すること、歌唱に必要な発声法を身に付けること、読譜や演奏で必要なソルフェージュ能力を身に付けること、受講者自らが心から歌唱することを楽しみ歌に込められたメッセージを感じ取ること、教材研究を通して音楽活動の展開に活かすことなどである。筆者の授業を受講した学生からは、最初は「歌うだけ」と思って講義に臨んだようであったが、リズムや音程を正しく歌う方法、歌詞が明瞭に伝わる発音の仕方、人前での歌唱経験、発声法についての考察や意見共有、歌

唱に困難を感じる部分の改善方法の考察など、個々が歌唱の活動を通して深化させた学びを持ったことはレポートからも明らかであった。

小学校、中学校、高校の教員を目指す教育学部の指導では、次の通りである。

まず小学校「音楽」の授業においては、音楽の基礎知識、弾き歌い、器楽（リコーダー）を取り上げ、小学校教員に必要な音楽の基礎を、歌唱、器楽、理論の各活動を通して総合的に学ぶことを目的としている。歌唱では、教科書に掲載されている発声練習を行いながら記載事項について考察をする時間や、学生自身が声と向き合う時間も可能な範囲で設けている。また器楽の演奏では学生の気付きを受講生で共有し、ここはどのように演奏したいか、それは何故か、こうしてみてもどうかなど、表現の工夫に至るまでの過程（タンギングや息のスピードの変化など）から出てきた演奏表現を受講生で試してみるなど、学生各々が主体的な学びを持ち共有できるようにしている。

次に中学校や高校の音楽教員を目指す学生の「声楽」の授業においては、発声練習やイタリア歌曲、日本歌曲、ドイツ歌曲の歌唱実践を行っている。ここでは学生自身が自分の声について既習の事項をふまえて考察し、技能の習得のプロセスや、声の変化を感じ取って成果や課題について言語化して指導に活かせるようにするなど、工夫を試みている。これらの学びが実習や教育現場でどのように繋がっていくのか、楽しみである。

2-1 歌唱への意識調査

授業時に学生の歌唱に関するインタビューからは、「好きである」「苦手である」「好きであるが得意ではない」、と様々な回答が得られた。また「好き」の理由は、「楽しいから」「癒されるから」「声を出すと気持ちがいいから」などであるが、「苦手」の理由は、「音程が取れないから」「下手だから」「人前で歌うのは恥ずかしいから」などである。また歌唱時の悩みについては、「高い音が歌えない」「音が合わない」「裏声の出し方が分からない」など様々であった。

音の高さについては、子どもの歌や小学校の歌唱曲では、全般に子どもの声域に合わせて音域が高く、学生が歌唱するのに困難を感じる姿が見

受けられた。解決方法の一つとして発声練習を授業で取り上げているが、詳細は3の項目で述べることとする。

音程やリズムについては、歌唱時に困難さを感じる部分（リズム、跳躍進行など）を挙げて改善に繋げるようにしている。例えば正誤の違いを理解するためにリズムを発音しながら手拍子をするなどして、理解したことを歌唱実践へと繋げるようにしている。詳細については後述する。

声の出し方では、「自分が実際に出している声が地声か裏声のどちらであるかわからない」「チェンジ（喚声点）になる部分の声が安定しないことに違和感をおぼえる」などの悩みを抱えている姿が見られる。そのため発声練習の中で地声と裏声を出す練習や、個別に直接声を聴いて助言をするなどしている。具体的に取り上げている練習についても後述することとする。

2-2 学生の実態

ここでは音程とリズム、声の出し方に焦点化を図って例を示す。

2-2-1 歌唱の音程について

ここでは例で次のAとBの楽譜を示す。何度か授業で取り上げて歌唱している曲であるが、一度覚えて歌っている音程を修正することに難しさを感じた箇所を例に示す。次に示すAとBの楽譜で、Bが正しいとする。また□で囲ったAのコードがC、BはCmとする場合、コードを聴くとAとBの音の違いは明らかである。さらに:.....:で示した音の跳躍はAでは短3度に対し、Bでは完全5度となり音程の差は明らかであるが、アカペラで歌唱した際に、Aで歌っている姿が見られた。口頭で正しい音を示したが分かり辛かった様子であったため、手の位置や角度を変えて示したり、顔の角度を変えて歌唱するなどして、AとBの違いを理解して歌唱表現に繋げることができた。全体練習ではピアノ伴奏と共に歌唱したため、音程は改善されたように感じるものの、改善したことが継続されているかは不明である。



2-2-2 歌唱や器楽のリズムについて

音の長さの説明や実際にリズムを説明する際には手拍子をしてみるなどの試みを授業で取り入れられているが、既習事項の応用がなされていない、違いが理解できていないという姿が見られた。



先ずリズムの違いについて挙げる。上のリズム譜Cで楽譜に記載があるものの、実際にはDで演奏しているケースである。音の長さの違いについて  を  と示すなどし、 と  のリズムが異なることへの理解はできている様である。次にCとDの両方をタアツタやタタと発音しながら手拍子をし、さらに※の付いている部分で足踏みするなどしてリズムの理解から演奏実践に繋げている。しかしDの演奏に戻ってしまう様子が散見された。

次に歌唱を通してリズムや音程などの曲全体の把握について挙げる。学生の中には、曲を歌ってからピアノの弾き歌いの練習をするとリズムや曲の雰囲気が掴めて練習に取り掛かりやすい様子である。また歌いながら右手の練習をしたり、歌とピアノのリズムを一致させようと何度も繰り返し練習する様子が見られ、弾き歌いの練習効果は明らかである。未習曲の指導法については、今後の課題である。

さらに次の図の1回目に出てきたEのリズムと、2回目に出てきたFのリズムが異なる場合に、どちらも同じリズムで演奏する姿が見受けられることについて例示してみる。学生に対して度々説明を行うなどしたが、実技試験でも改善が見ら

れないことがあった。楽譜を見ながら正しいリズムで演奏するように再度指導して、その時は改善されたが、継続されているかは不明である。



(学生には教育現場を想定して、ある程度の音楽の基礎知識の理解や読譜力を身に付けておく必要性について伝えているが、指導用CDやデジタル教科書などの活用が可能であることも伝えている。)

2-2-3 歌唱における発声について

学生の歌唱の様子や授業ノート(リフレクションシート)、レポートなどから効果が見られた部分や、歌唱指導法の課題について、以下の4つの項目を述べることにする。

①手で音程を示しながら歌う練習：特に跳躍進行においては、分かりやすいということであった。

②腹部や腰に手を当てて、身体を使っていることを確認しながら歌う練習：4年生の教科書の『歌声②』には「スタッカートのところは、わらったときのようなおなかの動きを感じて、(後略)」(小原ほか：2021b, p.35)とある。ここで下線部の箇所が実際に感じられるか、ということを学生と試してみた。腹筋や横隔膜の運動が必要であるとはいえ、動かない、分からない、といった声が出なかった。声の出る仕組みについての理解が必要であるが、授業によっては説明する時間を設けることができない場合もあった。どうしたら動くことを実感できるか、その場で駆け足をすることで運動を伴いながら歌ってみる案などを提示するに留まった。身体を使って声を出す方法についての効果的な指導法は筆者の課題である。

③口を動かしながら歌う練習：音階の上下進行をwaで歌唱(譜例参照)した。歌詞の発音を明らかにするために、唇を動かして歌うことを伝えた。このことは歌詞の音読とも繋げることで、言葉(歌詞)がより伝わりやすくなるという意識を持つことになったと思われる。



④地声と裏声で歌う練習：声のチェンジ(喚声点)に気付くようなオクターブや、waで上下進行しながら半音ずつ上げていく練習である(譜例参照)。歌唱をしながら声が変わる部分で違和感を覚える様子が伺えたり、チェンジ部分について授業ノートへの記載があったりするため、個別に声掛けをするなどして声について授業時に学生と教員で意見交換をしたり、受講生全員と共有するなどしている。できるだけ滑らかな移行や、声帯に負担を掛けないようにするために、同じ練習を繰り返すのではなく、唇を使ったり、舌を動かしたり、呼吸の量やスピードなどをコントロールしながら声を出すなど、各々が模索している様子であった。



ここで声の出し方について学習指導要領の記載について挙げる。平成元年告示の小学校学習指導要領までは「頭声的発声」による発声指導が求められている。上記の小学校第3学年の内容には「発音及び呼吸の仕方に気を付けて、頭声的発声で歌うこと。」(文部科学省：1989)とあり、指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱いでは、「発声の指導については、頭声的発声を中心とするが、楽曲によっては、曲想に応じた発声の仕方を工夫するようにすること。」(前掲：1989)とある。平成10年に告示された小学校学習指導要領の第3・4学年の内容には「呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない声で歌うこと。」(文部科学省：1998)となり、現在では「呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能」(文部科学省：2017a)となっている。ここで示される発声については、平成29年告示の小学校学習指導要領解説音楽編において、「自然で無理のない歌い方で歌うとは、児童一人一人の声の特徴を生かしつつも、力んで声帯を締め付けることなく、音楽的には曲想に合った自然な歌い方で歌うことである。指導に当たっては、児童が歌い方を試す過程で自分の声の特徴に気付くこ

とを大切にしながら、自然で無理のない歌い方で歌うことができるようにすることが求められる。」(文部科学省：2017b, p.62) とある。学年が上がると変声期及び変声前後に対する声の配慮も必要となってくるため、発声法についての知識や技能、各自の声の違いについても認識しておくことが必要であると思われる。

子どもたちが歌いやすい、歌っていて楽しい、と思える歌声作りを子どもたちと共に行うことが必要ではないかと考える。声は各々が持つ異なる声帯から発せられ、また声に関する捉え方は様々である。児童生徒の個々の声に向き合うためにも、声そのものの知識や指導の引き出しを持っておく必要性を感じる。

2-3 学生の指導における課題について

音程とりズム、声の出し方の一部について例を出して示してきたが、学生が授業を通して得た様々な学びを繋ぎ、継続させ、教育実習などの授業実践を経てさらに成果や気付き、課題を持ち、学びを深化させていくことが望まれる。特に歌唱は独唱曲に留まらず、合唱活動の中でも指導力が求められる。教育現場で求められる歌唱指導力については、教員が抱える現場での悩みや学生への歌唱の指導から、指導者として身に付ける力については、改めて研究課題として考察を行っていききたい。

3. オンライン研修コンテンツへの動画提供について

文部科学省委託事業の一つである「おきなわ教員研修高度化フォーラム」の中で、学校教員対象の「オンライン研修コンテンツ」に、筆者は「歌唱指導の引き出しを豊かにしよう」という研修タイトルでコンテンツを作成した。本コンテンツ提供に応募したきっかけの一つは、現役教員の歌唱に関する悩みに接したことや、本コンテンツ作成を経て得た気付きや課題を保育者や教員を目指す大学生の指導に活かしていきたいと考えたことに因る。

3-1 内容について

「歌唱指導の引き出しを豊かにしよう」として

「発声指導編」と「歌唱指導編」を提供したが、発声練習の方法、歌唱指導においては部分的に例を挙げるに留めた。本稿ではコンテンツの詳細について、楽曲を挙げて具体的に述べることにする。

3-2 発声指導編

先ず発声指導編として、発声に必要な声について、また呼吸について、さらに発声練習について挙げた。内容は次の通りである。

3-2-1 「声に必要な要素」について述べる。ここでは次の①～⑤に焦点化を図って挙げた(コンテンツでは省略したが、「声」そのものについて、身体の成長と声の変化や、世界に一つしかない自身の声を大切にしたいということは、授業時に学生にも伝えていることである)。

①身体全体

…脱力する部分、支える部分

普段行う運動を取り入れて、脱力するための方法や、身体を支えるために下半身にどのように力を入れるのか、様々な方法を試してみることを提案している。

②呼吸(息)

…声のエネルギーとなる部分

歌唱の際に必要な呼吸として、一般的には腹式呼吸が望ましい。肺に入った空気による横隔膜の下方運動によっておこる呼吸を腹式呼吸といい、横隔膜を有効に活用して声を出していく。呼吸の指導時には「お腹や背中に空気を入れるように」という言葉をよく耳にするが、空気は直接腹部には入らない。この横隔膜の動きを活用させて、身体を使って声を出していく。

腰や腹部に手を当て、先ずは時間をかけて息を吐いてから吸うと身体の動きが分かりやすい。また仰向けになって呼吸をすると腹部の動きが明らかでより分かりやすい。さらにゆっくりと息を吐きながら膝を抱えるなどしてしゃがんで小さくなり、時間をかけて息を吸いながら立ち上がって手足を伸ばしていくということも実践している。実際に学生の姿からも身体を動かすことで気持ちがりラックスする様子が伺え、呼吸を意識する効果が見られた。

③声帯

…息を音に変換させる部分

実際に声になる部分で、長さが約1.5~2cm程度である。また声帯はデリケートであるため、負荷をかけてしまう（力んで声を出す、喉に力を入れて叫ぶ、腹部の筋肉の運動を伴わずに大声を出し続けるなど）と声が出にくくなったり、息漏れのような声になったり、声がかすれてしまうなどの声帯のトラブルが生じてしまう。そのため腹部の筋肉の運動による呼気のコントロールや、下半身の支え、息のスピード、口の開け方などの工夫が必要である。

④共鳴部分

…声を多彩にする共鳴を起こす部分

声帯から上の部分、咽頭や口腔、鼻腔などの空間を確保することである。響きを作る上で、共鳴部分の確保は必要である。

⑤リラックスした状況

…リラックスした身体や心

身体が緊張していると声は出辛い。リラックスした状況を作るためにも、身体を動かしたり、時間をかけて呼吸することを心掛けたい。

3-2-2 次に「呼吸から始めよう！」として、呼吸法を挙げた。学生の授業ノートからも、身体がリラックスした状況を作ることで声が無理なく出るようになった、などの声を出す上での効果についての記述が見られた。

①身体をリラックスさせよう

…呼吸をしながら身体をリラックスさせる

首や肩を動かしたり、ストレッチをしたりしながら身体をリラックスさせる。同時に呼吸をすることを意識する。

②呼吸をしよう

…ゆっくりと呼吸をする、同時に身体を動かす
 ゆっくりと息を吐いて身体の緊張を解いていくと、自然に空気が入る。緊張している時は特に呼吸が浅くなるため、時間をかけて息を吐く、吸う、吐くの繰り返しを、身体を動かしながら行う。

③響く空間を保ちながら声を出そう

…口の中の開け方など共鳴する部分に意識を持ち、呼吸から歌唱に繋げる

口を閉じて鼻で呼吸をすることで、鼻腔の意識

に繋がることもある。あくびをするように、歯磨きをするように、うがいをするように、など具体的な表現で示しながら指導し、喉の奥を開けるように意識させる。さらに少し頬をつまんで口の中を開けたり、頬を上を引き上げるなどしながら、a母音で声を出してみる。

3-2-3 「使う身体の部分を確認しながら声を出してみよう」として、発声練習の一例を挙げた。声を出しながらどの様に身体を使ったか、この発声練習は何を目的としているのかなどを併せて挙げた。また指導者の伝え方は多様であり、指導を受ける側にとっては様々な捉え方をすることも想定内として考え、多角的な引出しを持つことが必要ではないかと提案するものである。

①身体（横隔膜や腹筋や背筋、下半身の支え）を使いながら、息・声を出す練習

…例)「ホ」のスタッカートで発声する

発声しやすい音域で、4回スタッカート、1回伸ばす。最後の音を伸ばす際には無理に伸ばさず、遠くを目指してボールを投げるように出す。身体の運動によって呼気が声帯を通して音になることを確認する。歌唱する側が無理のない音域まで、半音ずつ上げていく。身体を使うことを意識したため、腰に手を当てて身体の動きを確認したり、上半身の脱力に繋げるためにも跳躍しながら歌うのも、学生の歌唱から効果が見られた。



例: ho ho ho ho ho---

②あくびをする、溜息をつくように声を出す練習

…例)「ア」の母音で発声する

「ア」を用いて様々な感情の「ア」を発音をさせ、少しずつ音域を広げていく。その際には自然な口の開け方にするが、奥歯の間を開けるなど口の中奥を開け、息を使って発音するようにする。次の楽譜では音程や音価も示しているが、具体的には示さずに声の出しやすい音程や音域で自由に行う。最初は恥ずかしくて声は出ないが、好物の前に感動した声で、など具体例を出しながら筆者が先導して声を出していくと、真似をして声を出

すようになる。また周りを見ながら声を出すなど、学生の表情も柔らかくなっていく様子が伺えた。



例：a

③5度の音程を滑らかに上下させて歌う練習

…例) ハミング、リップロール、巻き舌、「ア」などを用いて発声する

ハミングを用いて鼻腔の意識を持つこと、巻き舌やリップロールで舌や唇の力を抜くこと、「ア」で歌ってみるなどを繰り返しながら、半音ずつ上げていく練習を行う。様々な声の出し方を体験して自分の声を知ることが目的としている。例えば低音では息を流しながら地声を出し、グリッサンドで様々な音を経由して上下行する。なお、以下に声の出し方や音域を例示しておく。



例：ハミング 例：リップロール・巻き舌



例：a

④前掲の③をさらに1オクターブの音程に広げて、滑らかに歌う練習

…例) 「アーオー」を用いて発声する

ここでは以下の3点を実践する。まず息にスピードを持たせて1オクターブの音域を一気に駆け上がりながらチェンジの体験をする。次に音が上がっていくにつれて重心をつま先から踵に移動させ、また音が下がっていく時につま先に重心を移動させながら、息の流れと下半身の支えを保って歌う。さらに母音の「アーオー」を用いて、音が上行するにつれて「ア」から唇を縦に開けて「オ」の口に変化させながら、下行の際に響きの統一を意識して歌う。また手を前後・左右・上下に真っ直ぐに広げていくなどして、腹筋や下半身の支えに繋げるようにしている。



例：a o a

⑤口を開けて舌を動かしながら歌う練習

…例) 「アエアエ」「アイアイ」を用いて発声する
口の中を開けて、舌を動かしながら「アエアエ」

や「アイアイ」などの母音を用いて歌う。口の中が母音によって狭くなるため、口の中の空間を保つように親指と人差し指で軽く頬を挟むなどして歌う。半音ずつ上げていきながら、無理のない音域まで歌う。



例：a e a e a e a e a



例：ai ai ai ai a

⑥唇を動かしながら歌う練習

…例) 唇を動かしながら「ワ」を用いて発声する
前掲の⑤と同様に、響きを確保するため、口の中の空間を作るために、親指と人差し指で軽く頬を挟んで歌う。半音ずつ上げていきながら、無理のない音域まで歌う。レガートで息を流して歌ったり、付点を用いて腹筋や横隔膜などによる運動を意識して歌うなどしている。



例：wa wa



例：wa wa

他にもコンテンツでは提示していないが、学生の歌唱指導で用いており、効果的であると思われる練習の一例を挙げる。

⑦口の中を少しずつ開けていく練習

…例) 「ミーアーウ」を用いて発声する

口の中の空間を保ちつつ、「イ」の母音で口の中奥を上を開ける意識を持つ。「ア」では明るい響きを作り、声の響きを保ちつつ身体を広げていきながら「ウ」の母音で響きをまとめる。「イ」から「ア」の母音に移る際に滑らかに移行するように、上行では口の中を開けていくことを意識する。学生の歌唱からは声量の拡大や響きの統一などで効果が見られた。



例：mi - - - a - - - u

⑧腹筋の運動を用いて音域を広げる練習

…例) 「ア」を用いて発声する
ここではスラーの付いている部分をクレシェン

ドやデクレッシェンドを用いているが、学生個々の声によって指導を変えている。身体を使って声を出すこと、声帯の負担を軽減するなどを目的としている。学生の歌唱では効果が見られる練習の一つである。



これらの発声練習は、筆者が学生の発声指導において実践している方法の一部である。個々の学生の様子を見ながら発声練習のメニューを組み立てて行っている。また筆者自身が声楽の指導を受ける中で効果的であった発声練習も含まれており、実践している内容でもある。

3-2-4 「発声練習と歌唱を繋げよう」を提案する。ここでは例として、季節の歌や歌い馴染みのある曲、歌唱曲（既習曲）の一部分を使用する。発声練習と歌唱が繋がらない、活かさないという悩みの改善に繋がらないかと提案するものである。筆者は合唱指導などで用いているが、例として行っていることを次に挙げる。

- ・季節の歌、歌い馴染みのある曲の一部分（8小節間ほど）を取り上げ、調性を半音ずつ上げながら行う。
- ・現在歌っている歌唱曲の一部分（既習曲の一部分）を使って、歌唱に困難さを感じる部分をピックアップする（順次進行や跳躍、付点、十六分音符の下行形など、歌唱に困難さを感じる要素のある曲の一部を取り入れる）。

具体例は次の通りである。

- ①母音で歌う（aなど）
- ②スタッカートで歌う（ゆっくりと）
- ③ハミングやリップロール、巻き舌で歌う
- ④waで歌う
- ⑤歌詞の母音で歌う
- ⑥歌詞で歌う

3-3 歌唱指導編

次に歌唱指導編として、範唱の一例、歌唱に困難さを感じる部分の予測、それに繋がる歌唱指導法の一部を挙げた。本稿では楽曲を例に挙げ、述べていくこととする。

3-3-1 練習内容について

①歌詞の音読をすることによって、言葉の意味や言葉のまとまり、言葉の発音上の課題に気付くことができると思われる。また言葉の意味について予め調べておく必要のある部分、言葉の途中で息継ぎをしないように注意したい部分、正しい言葉の発音などが考えられる。



→「春の／うららの」言葉の切れ目への意識を持つ。



→「山の端 (ha)」であり、waではない。言葉の最後にくる単語で、且つ音が高いため、hでは息を使って明瞭に発音する。

②範唱のための歌唱練習をすることによって、歌唱に困難さを感じる部分に予め気付くことができると思われる。例えば跳躍進行や、リズムの取りにくい部分、言葉の入れ方の難しい部分などが挙げられるが、歌唱練習を通して歌唱指導に活かすことができるのではないと思われる（ここでは必ずしも範唱をすることが目的ではなく、児童生徒が歌唱に困難さを感じる部分に気付きを持つために、教員自身が歌唱練習を行ってみることも一つである、という提案で述べている）。

例) 跳躍進行では手を使って歌ってみる。この場合は口の部分を片手で固定し、○の部分をもう片方の手で少しずつ上げていきながら、手を見て歌う。音程を取りにくい部分、また誤って覚えていた音を修正する際に手を使って示すことは、学生からも分かりやすい、という意見が挙がり効果が見られた。



例) リズムではターアタ、ターアッタの部分の違いの例を挙げる。A' やB' の楽譜を見比べて音の長さの違いを理解したうえで、AとBの楽譜に示されているリズムを手拍子しながら声に出すと、正誤に気付くことができる。また児童

生徒の演奏にも気付きを得ることができるように、双方のリズムで歌唱を行う。

「こいのぼり」文部省唱歌

A 

A' 

B 

B' 

③簡易伴奏を伴う弾き歌いについては、無理のない可能な範囲で行って欲しい、ということで、補足で挙げた。例えば音取りや、丁寧に歌わせたい時などに活かすことができる。また合唱曲などでは、パート毎に単音で音取りした後に簡易伴奏を付けることによって、曲の雰囲気が一から感じられ、楽曲の全体像の把握が可能になることもある。さらにテンポを落として丁寧に歌わせたい箇所を抜き出して歌唱練習する際にも、効果があると思われる。

歌唱曲の音域の配慮が必要である（調性を変える）場合や、ピアノが無い場所での歌唱活動、遊びの中での歌唱においてはアカペラでの歌唱も考えられる。アカペラ、指導用CD、デジタル教科書の活用、簡易伴奏での弾き歌いなど、柔軟に指導の中で適宜判断して取り扱い、児童生徒と歌唱活動を有意義なものにして欲しいと考える。

3-3-2 歌唱する際に困難さを感じる部分の予測から指導法の一例として、以下の点を挙げた。

①音程…跳躍進行部分ではどのようにしたら音が取りやすいかは、3-3-1①で述べた通りである。
②旋律…十六分音符、特に次に示す楽譜の□部分の下行進行に注意したい。母音を丁寧に歌うなど、音程が雑になってしまわないように速度を落とした練習も効果が見られるのは、筆者自身の演奏経験からも言える。

また一音節を2音など複数の音で歌唱する際には、ta-aなど母音を再度発音することは、他の歌曲を歌唱する際にも同様のことが言える。習得した内容を活かすことを心掛けたい。

「浜辺の歌」林古溪作詞 成田為三作曲

例) 

③リズム…付点については、3-3-1②で述べた通りである。リズムは、一度誤って覚えると改善に困難さを感じている学生が多く見受けられる。前掲の②で挙げたように、困難さを感じる箇所を取り出して正誤のリズム打ちを行い理解に繋げることはできても、曲の中で演奏する際に、自分自身がどちらで演奏しているの分からない、正しいと思って演奏しているが、誤ったリズムで演奏する様が見られた。

シンコペーションや、タイで繋がった部分では、言葉の入れ方が曖昧になる傾向があるので、注意が必要である。手でリズムを叩きながら歌う、また母音を歌い直すようにすることも効果があると思われる（楽譜参照）。合唱曲では歌に合わせて皆で手拍子することによって、縦の線が揃うなどの効果が見られた。

例) 

④言葉…日本語の発音については、コンテンツの歌唱指導の中で少し触れている。

言葉の発音について、学習指導要領でも取り上げられているため、ここで示しておく。小学校学習指導要領の各学年の目標及び内容には次の通り言葉の発音に関する記載がある。

〔第1学年及び第2学年〕「自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能」（文部科学省：2017a）

〔第3学年及び第4学年〕「呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能」（前掲：2017a）

〔第5学年及び第6学年〕「呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌う技能」（前掲：2017a）

また中学校学習指導要領の各学年の目標及び内容には〔第1学年〕〔第2学年及び第3学年〕とも「創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能」（文部科学省：2017c）を身に付けることにおいて、記載がある。学習指導要領解説の中で「言葉の特性には、言葉の抑揚、アクセント、リズム、

子音や母音の扱い、言語のもつ音質、語感などが挙げられる。また、それらが旋律やリズム、曲の構成などと深く関わり合って音楽を成り立たせている。」(文部科学省：2018d, p.40) とある。これらのことから、言葉の発音については正しく丁寧に取り扱いしていきたい。

ここでは促音・撥音・鼻濁音・有声音と無声音・語頭の発音の例について挙げる。

「ふじ山」 文部省唱歌 巖谷小波作詞

・促音：例) 

音価に応じて伸ばす長さは異なるが、促音が一瞬の間については、歌詞が意味するものを捉えて表現に活かしたい。

・撥音「ん」：

口を閉じて発音する→例) とんぼ

口を開けて舌尖を歯の裏に当てて発音する→例) つんだ

口を開けて舌中奥を軟口蓋に当てて発音する→例) りんご

音読をすることによって、口の開閉や舌の位置などに気付く学生が多くいるため、音読を歌唱に繋げることが大切である。

・鼻濁音：「はるがきた」など、ガ行で用いられる。語頭や外来語、数字、2つ以上の単語が合わさった言葉などは鼻濁音にはならない。「鼻濁音」について教科書では「(前略) 子音を鼻に響かせるように発音します。(後略)」(小原ほか：2021f, p.23) とある。「子音を鼻に響かせる」ことを児童生徒の理解から歌唱活動に繋げていくための方法については、次の研究課題とするが、「柔らかく発音する」や「その言葉を少し弱く発音する」などに置き換えてみることもできるのではないかと、と学生との意見交換でも挙げた。

・有声音と無声音：楽譜上に明確に無声音で歌うように指示してある部分と、指示が無い部分がある。「かなしい」では下線部がshiと母音を伴うが、「かなしくなる」ではshと母音が伴わない。音読をして無声音であるか、有声音であるか確認することが必要である。また作者の意図もあるため、注意したい。「(前略) 無声音に近い「くつ」や、語尾の「です」の母音を強調すると日本語らしさ

が殺がれます。ただし作曲上、無声音に長い音符が当てられた場合は有声化するしかありません。

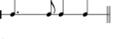
(後略)」(藍川：2006, p.24) とあるように、日本語の持つ雰囲気を活かしつつ、発音において判断が求められることにも注意したい。

・語頭の発音：子音を息や舌、唇を使って明瞭に発音する。但し、その言葉が持っている内容に合うような発音にする。全て同じように発音するのではなく、言葉にあった強さやスピードを考える必要があるということである。またしばしば「はっきり」と指導書に記述があるが、どのようにはっきりとするのか、例えばどのような息の出し方や、声の明るさが求められているか、ここでも音読の効果を活かしたいと考える。

3-3-3 ここで歌唱指導の一例として、小学校から「ふじ山」、中学校から「赤とんぼ」、高校から「この道」を挙げ、歌唱指導の一例を示す。コンテンツでは一部分しか取り上げられなかった(「この道」については述べていない)が、ここでは詳細について述べることにとする。

①小学校教科書掲載曲「ふじ山」文部省唱歌 巖谷小波作詞³

『尋常小学読本唱歌』(明治43年(1910年)発行)で発表された曲である。小学校3年生の音楽の教科書に掲載されている指導のポイントには、「歌詞をよく読んで、様子を思いうかべながら歌いましょう。」(小原ほか：2021a, p.38) とあることから、歌詞の音読を行うことで、歌詞の意味や歌詞の内容、言葉のリズムや発音について知ることができる。

・冒頭の「あたま」では、「あ」で口を適度に開けて息を流すことで、この曲が持つ  の付点四分音符の音価を保つことができる。

・「しほうの」では音読をすることに困って「Shihoo no」となることが明らかになる。「しほ一の」といったように「ほ」のo母音を伸ばして歌うことになる。

・「みおろして」では1音節に八分音符が二つ付くため、丁寧に息を流しながら歌うことを心掛けたい。詳細には「Mi o ro o shi i te」のように、太字・下線を付けている部分で母音を言い直すよ

うに歌う。さらに一番では「みおろして」二番では「きものきて」となっているが、歌詞の意味に沿った音の動きにも着目できると考える。

・「かみなりさまを」では1小節間一点二音の低音が続くため、柔らかく息を流して歌いたい。この部分、教科書では強弱記号が付いていない。指導のねらいにおいて、曲の山を見付けて歌うこと、そのためどのような工夫をしたら良いか、教科書の「見つけた曲の山をかじながら、声の強さや出し方をくふうして歌いましょう」（前掲：2021a, p.41）との記載にも注意して歌いたい。

・一番は「したにきく」、二番は「とおくひく」では、太字・下線部分が語頭の発音となるため、明瞭な発音を心掛けたい。このことは音読することに因って明らかになる。しかもこの部分では二点八音と一点イ音の短3度の下行進行を伴う箇所であり、丁寧な3度の進行と、言葉の意味を伝えるためにも言葉の発音に注意したい部分である。

・「ふじは」では曲の山となる部分であるが、この曲を通して最高音となり、しかも二分音符で伸ばす部分でもある。この太字・下線部分は指導書実践編には「発音に気を付けて」（小原ほか：c, p.44）とあるが、具体的にはどのようにしたら「発音に気を付けた」歌唱になるのか考えてみたい。強弱や表現の創意工夫に関わってくる部分でもあるが、「ふじ」のFuji (FはΦで記載する)の太字・下線部分で息を使うために腹筋の運動が必要となる。また音程も二点八音となり高いため、息の速度や量を確保した発音を心掛けたい（Φuの発音は「唇を前に突き出すようにして発せられる」（藍川：1998, p.133）とある）。

・「にっぽん」の太字・下線部分は促音と言われるもので、ここではリズムに注意する部分である。3-3-2の④で述べた通り、付点四分音符の音価をniのiの母音で伸ばし、さらにiを言い直してipponと歌うことになる。太字・下線部分が一瞬空白となるが、両唇を閉じて次のpoの音に向かって完全4度上行の緊張感を伴い、その後、下行の順次進行で主音に向かっていく。ここでの下行進行は指導書には「音の高さが低くならないように気を付けて」（小原ほか：c, p.44）とあるが、最後の「やま」の母音がいずれもaであるため、

口角を上げて明るい表情で歌いたい。

②中学校教科書掲載曲「赤とんぼ」三木露風作詞 山田耕筰作曲⁴

本楽曲は昨年筆者が取り上げている（持松：2023, pp.153-154）が、ここではさらに推敲を重ねて述べる。この曲は山田耕筰と共に多くの歌曲を残した三木露風の詩によるもので、1921年に作曲された。教科書には「旋律の動きや強弱の変化がどのように曲想と関わっているかを感じ取り、表現を工夫して歌いましょう。言葉の美しい響きを生かしながら、発音に気を付けて歌いましょう。」（小原ほか：2021d, p.28）との記載があるが、8小節間という短い歌唱部分ではあるものの、音楽と言葉の関係性、言葉の発音や意味、歌詞の表す情景、音程、強弱などから密度の濃い指導内容が伺える。歌い出しの2小節間で音程が変口音から二点変ホ音（変ホ長調の場合）まで一気に上行する。

山田耕筰の追求した言葉と音楽の関係性に着目し、両者の紡ぎ出す豊かな世界観は聴き手の心を捉える音楽になっていると思われる。日本歌曲に造詣に深い畑中良輔も「この中にうたわれる「幼き頃への回帰」は、私たちの持っている絶えざる願望であり、この歌曲はそれを十分に充たしてくれるものである。」（音楽之友社：1998, 巻頭）と述べているように作者が抱いた幼い頃の想いを感じずにはいられない。

・歌詞の内容を検証していくと、一番が現実から過去へと移行していき、二番と三番で過去への回想、四番で再び現実に戻る様が描写されている。指導書には「詩の構成を理解して歌唱表現に生かす。」（小原ほか：e, pp.34-35）とあるが、どのように歌唱表現に生かすのか、明らかな歌唱の差異とまではいかなくても、前述の歌詞の流れを理解したり、それを前提に速度に変化を持たせたり、間奏（前奏）を入れてみたりするという工夫はできるのではないと思われる。

・また歌い出しに「最低音（歌い出しに気を付けて）」（前掲：e, pp.34-35）とあるが、変口音と音がかなり低いことや、強弱記号もpの指示がある。冒頭の発音が一番は「iyu」、二番「iya」、三番「jyu」、四番「iyu」であり、特に一・二・

四番では半母音を含むヤ行の音で始まる。ここでは表記の通り、iを構えてyとなるため、発声上地声であっても丁寧に息を使ってiからyの発音へ移行したい。三番のjyuではjの音の摩擦音を美しく発音したい。中学校の学習指導要領音楽編の第1学年の内容には「創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能」（文部科学省：2018c）とある。また解説には発音についての記載があるが、ここでは「発音には、子音や母音の発音などがある。例えば、日本語のもつ美しさを味わえる歌唱教材を扱う授業では、生徒が、歌詞の詩情を味わいながら子音や母音の発音を工夫するなどして技能を身に付けていく学習が考えられる。」（文部科学省：2018d, p.41）とある。さらに内容の取扱いと指導上の配慮事項には「我が国で長く歌われ親しまれている歌曲のうち、我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又は我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえるもの。（後略）」（前掲：2018c）とあり、解説には「我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえる歌唱教材を扱うことによって、生徒は我が国の文化のよさを味わい、日本語の響きを感じ取ることができる。このことがひいては、我が国の文化を尊重したり、日本語を大切にしたりする態度を養うことにつながると考えられる。」（前掲：2018d, pp.107-108）との記載があることから、言葉の美しさや自然や文化の素晴らしさを味わうことの大切さを伝えていく必要がある。言葉の発音については、後述の通りであるが、それをどのように取り上げてどのような手法で伝えていくかは課題である。

・「発音に注意」（小原ほか：e, pp.34-35）という記載が指導書には散見される。例えば「とんぼ」「つんだ」では撥音の仕方に注意が必要であるということである。「とんぼ」は口を閉じて発音し、「つんだ」では口を開け舌先を前歯の裏に当てて発音する。他にも口を開けて舌の中奥を上顎（軟口蓋）に付けて発音するものがあるが、音読を通して「ん」の発音を確認すると分かりやすいと思われる。

・「じゅうご」の太字・下線部分は鼻濁音にならないが、「こかご」は鼻濁音となる。

・「とまっているよ」の太字・下線部分は促音で

ある。「つ」の前の「ま」の母音aを音価を保ち、-atteと発音する。ここでも一瞬の促音が持つ間が生まれるが、上行していく音型であるため、緊張感を大切にしたい。

・「みたのは いつのひか」の間にプレス記号がある。ここでは前の小節が八分音符で動きがあり、一音節を2音で歌っており、mitanowa-と母音が伸びる部分である。ここは音価を保って丁寧に歌いたい。息継ぎをするために、前の音が乱雑に切れることなく歌いたいため、少しプレス記号のところで間を持たせると、その後のpに入っていくやすいと思われる。これは縦書きの歌詞を見ると言葉のまとまりが明らかである。また実際に歌ってみると僅かな間が存在することによって、より丁寧に歌えることが分かる。

・「いつのひか」「まぼろしか」という言葉の意味を考えたとき、それぞれの言葉が持つ懐古の情や、温もり、定かではない記憶ではあるものの願望や心の奥底を刺激される言葉であるように思われる。学生が日本の歌を歌って、懐かしい、何となく心が揺さぶられる、みんなが共通の気持ちを抱く、日本独特の感性を感じる、などの意見を出すが、言葉や音楽から世代を繋ぐ、歌い継いでいくことの必要性を感じているようであった。

・音読をすることによって、言葉の抑揚と旋律の動き、強弱記号の関わりが理解できる曲である。言葉に着目すると、自然と音の長さや、速度、強弱などに変化が生まれ、筆者も歌唱する際は何度も音読をしてこの曲の世界観をいかに演奏再現できるか、試行錯誤しながら取り組んでいる。

③高校教科書掲載曲「この道」北原白秋作詞 山田耕筰⁵

北原白秋と山田耕筰による「詩と音楽」の研究は周知の通りである。本楽曲の詩は1926年児童文学雑誌『赤い鳥』に掲載され、1927年『山田耕筰の童謡百曲集』に収録された⁶。作者について、またその他の作品については、多くの先行研究もなされており、ここでは省略する。楽曲については、5-7-6(2-4)-5-7の音数を持ち、4連の詩で作られている。曲は四分の三拍子の途中に二拍子が入り、言葉の流れが自然に紡ぎ出される有節歌曲である。

・出だしは一番と三番で「この」、二番と四番で「あの」とある。二番と四番ではさらに「あのおか」「あのくも」となるが、いずれも冒頭の二文字が示すものについて考えて歌いたい。今、目の当たりになっている情景なのか、記憶をたどっていった先の場所なのか、実在する場か否か定かでない場所なのか、心の中の場所なのか、様々な捉え方ができると思われる。それによって冒頭部分を歌唱する際の息の使い方、視線の持って行き方も変化が生まれると思われる。

・「いつか」の時間も様々である。近い過去か、遠い過去か、幻か、など考えることができる。

・「ああ そうだよ」では、その前の休符を活かしてプレスをどのように取るかで表情が変化すると思われる。



またピアノのアルペッジョを受けて、「ああ」と入っていく。ここではピアノパートには*colla voce*の記号が付いており、また前掲の楽譜の通り、二点ホ音にはテヌートが付き、「ゆるく」とあることから、少し時間をかけて歌うことも考えられる。この「ああ」をどのような感情で歌うのか、それはなぜか、ということを歌詞から考察して様々な歌い方を試したい。また言葉も「ああ」という感嘆詞であるため、少しポルタメントを付けながら歌うことも考えられ、様々な「ああ」の歌唱表現が可能である。またその前の休符の取り方も合わせると、幾通りも考えられ、筆者自身も歌い試しているところである。

・前掲の楽譜の  部分では音が7度下行するが、スラーが付いている。言葉も一番から四番まで、一音節を2音で歌う。ここでは音域にチェンジ（喚声点）が含まれる部分でもあるため、滑らかにポルタメントを付けながら歌いたい。さらにデクレッシェンドの指示もあるため、身体を広げていきながら息を流して歌うことを心掛けたい。

・一番の後半の歌詞には「あかしや」「はな」「さいてる」というように、語頭はa母音が多用されている。歌詞の内容に沿って明るく発音したい。

・三番では「いったよ」の部分では促音に注意し

たい。i-it-taと同じ八分音符ではあるが、促音の持つ緊張感を大切にしたい。

・言葉の抑揚や発音、言葉のリズムと音楽の関係性に気付き、自分たちの歌唱表現に繋げるようにしたい。そのためにも歌詞の音読は効果があると思われる。

・筆者が歌唱する場合は、全体の速度や強弱、間奏などに工夫をしている。演奏者によって解釈は多様であるため、聴き比べをするなどして、なぜそのような歌い方をしたのか、比較研究することも授業の中で表現の深化に繋がるのではないかと思われる。

3-4 コンテンツ資料作成から得た課題について

コンテンツの活用による効果や課題については、実際にこのシステムの運用が始まってから明らかになってくることと思われる。ただこのコンテンツの資料作成を通して、教科書や指導書に記載されている言葉の更なる解釈や指導の手立てを探る必要性にヒントを感じたところである。また教員の歌唱に関する悩みもインタビューを重ね、歌唱に関する指導法の引き出しを柔軟に持てる研修内容をさらに検討したいと考える。さらにこれらを受けて学生の歌唱法の醸成に向けた指導法の考察に繋げていきたい。

4. 歌唱実践から探る学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて まとめと今後の課題

音楽教育専修に所属する学生の「声楽」の授業では発声練習や歌曲に取り組んでいるが、その学生と共に教科書に掲載されている発声の指導内容について、授業の中で指導法の考察を行っているところである。学生自身が受けている発声指導や歌唱指導を、今度は指導者という立場で児童生徒に対して実践していく上で、小学校や中学校音楽の教科書に掲載されている発声の指導内容について理解し、より分かりやすく具体的な内容を伴った伝え方にすることや、指導に生かす具体的な方法が指導者には求められる。例えば口の開け方にしても、口の無理な開け方になってしまったりは故障を引き起こす要因になったり、口の奥を開けることによって声が出ない、暗い響きになってしまう、歌唱に困難さを感じてしまうことにもなりか

ねない。教科書や指導書、参考資料にある「〇〇に気を付けて」という記載事項のねらいや具体的な指導法などの検討を重ねて、歌唱の指導に活かしていきたいと考える。教員を目指す学生の学びが知識や技能の習得から理解、授業実践へ、さらに他の教材に活用できるような歌唱法の醸成に向けた工夫を、引き続き研究課題としたい。

本稿は、学生の音楽や、歌唱、声楽の授業における「教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けた取り組み その2」として、研修コンテンツの作成も一つのきっかけにしつつ、発声指導や歌唱指導の方法から考察を行った。教員として子どもたちと音楽活動を持続的で豊かなものにしていくために、さらに多角的な視点から物事を捉える力を深化させていくための一考察について述べてきた。本稿の歌唱指導で挙げた曲の中には筆者自身も演奏実践を行いながら気付きを得て、学生の指導に活かしたこともあったことから、今後も保育者や教員を目指す学生の音楽や歌唱指導に、自らも演奏実践の研鑽を重ねつつ、さらに指導法の研究を継続させ深化させていきたい。

引用文献・参考文献

- ・米山文明「声と日本人」平凡社（2007）
- ・斉田晴仁「声の科学」音楽之友社（2016）
- ・大賀寛「美しい日本語を歌う」カワイ出版（2003）
- ・藍川由美校訂・編「日本の唱歌」音楽之友社（2014）
- ・藍川由美「これでいいのか、にっぽんのうた」文春新書（1998）
- ・藍川由美「日本のうた」歌唱法」カメラータ・トウキョウCMCD-99029（2006）
- ・音楽之友社編「日本歌曲全集3 山田耕筰Ⅲ」音楽之友社（1998）
- ・持松朋世「教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて～歌唱における発声法や言葉の発音から探る その1～」琉球大学教育学部紀要第102集（2023）
- ・初等科音楽教育研究会編「初等科音楽科教育法」音楽之友社（2021）
- ・中等科音楽教育研究会編「中等科音楽教育法」音楽之友社（2020）
- ・有本真紀・阪井恵・津田正之編「小学校音楽科教育法」教育芸術社（2019）
- ・小原光一ほか「小学生の音楽1～6」教育芸術社（2021）
- ・小原光一ほか「小学生の音楽3」教育芸術社（2021）a
- ・小原光一ほか「小学生の音楽4」教育芸術社（2021）b
- ・新実徳英ほか「小学音楽 音楽のおくりもの1～6」教育出版（2021）
- ・小原光一ほか「小学生の音楽3 指導書 実践編」教育芸術社c
- ・小原光一ほか「中学生の音楽1」教育芸術社（2021）d
- ・小原光一ほか「中学生の音楽1 指導書 実践編」教育芸術社e
- ・小原光一ほか「中学生の音楽2・3上」教育芸術社（2021）f
- ・小原光一ほか「高校生の音楽1」教育芸術社（2018）
- ・新実徳英ほか「音楽I Tutti+」教育出版（2022）
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成元年告示）」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/old-cs/1322335.htm（2023年10月23日最終アクセス）
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成10年12月告示）」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1319999.htm（2023年10月23日最終アクセス）
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）」https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_01.pdf（2023年10月19日最終アクセス）a
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_007.pdf（2023年10月23日最終アクセス）b
- ・文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）」https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf（2023年10月19日最終アクセス）c
- ・文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編」教育芸術社（2018）d

脚注

- ¹ 琉球大学HPより参照。＜令和5年度文部科学省委託事業＞おきなわ教員研修高度化フォーラム <https://www.edu.u-ryukyu.ac.jp/educator/ok3> (2023年10月16日最終アクセス)
- ² 持松朋世「教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて～歌唱における発声法や言葉の発音から探る その1～」琉球大学教育学部紀要第102集 (2023)。
- ³ 小原光一ほか「小学生の音楽3」教育芸術社 (2021), pp.38-41参照。
- ⁴ 小原光一ほか「中学生の音楽1」教育芸術社 (2021), pp.28-29参照。
- ⁵ 小原光一ほか「高校生の音楽1」教育芸術社 (2018), pp.20-21、新実徳英ほか「音楽 I Tutti+」教育出版 (2022), pp.14-15参照。
- ⁶ 大賀寛「美しい日本語を歌う」カワイ出版 (2003), pp.126-129参照。